

〔研究ノート〕

競技力途上の大学グレードにおける コーチングに関する一考察

—大学ラグビーのコーチングに着目して—

早坂一成

要 旨

本実践研究では、競技力途上である大学グレードのラグビーチームの様相をピリオダイゼーション、チームマネジメント、競技に適した能力の発掘（Talent Identification; TI）、適切に計画されたプログラムによる能力の育成（Talent Development; TD）に分類して明らかにした。実際には、筆者が監督を務めたNGURFCの12年間を第Ⅰ期：2011年-2014年：復興期、第Ⅱ期：2015年-2018年：進行期、第Ⅲ期：2019年-2022年：達成期に分類したコーチングの取り組みが、達成目標である全国地区対抗大学ラグビーフットボール大会優勝などの成果にどのように作用したかを示した。

キーワード：大学ラグビー、競技力向上、スポーツコーチング、スポーツマネジメント

1. 緒言

スポーツの競技力向上を進めていく上で、他の文化活動と同様に一定の計画を持って遂行されるべきである。スポーツの場合、競技力向上のためのスポーツ政策としては、タレント発掘・育成（Talent Identification and Development; TID）具体的には競技に適した能力の発掘（Talent Identification; TI）と適切に計画されたプログラムによる能力の育成（Talent Development; TD）が一般的である[4]。また競技トレーニングは適切なトレーニング計画を策定して行わなければならない。

一般的に競技トレーニングの計画は中・長期計画から年間計画、一定期間内の主要な試合において最高の成績を上げることを目指して、試合までの期間をコントロールしやすい小さな期間に区分してトレーニング内容を組み立てる、トレーニングピリオダイゼーションモデルを元に遂行されている[10]。さらにコーチングにおけるマネジメントとして、チームマネジメントなどのトレーニング以外での活動も競技力向上に影響を及ぼす。加えて学生スポーツは、その教育的意義から主体的なチーム・マネジメントが必要とされる[5]。

筆者は強化クラブに指定されている本学ラグ

ビー部（以下、NGURFCと表記する）の監督として、2011年より2022年の12年間務めてきた。着任にあたり、競技力が十分に整っていない大学ラグビーチームのコーチング及びマネージメントを行う際、さまざまな準備及び計画策定を試みた [4]。その際、競技力途上の大学グレードのコーチングは、指導者間の情報交換や専門雑誌等で散見される程度で、学術的な資料を検索しても見いだすことができなかった。そのような経験的な資源となる育成レベルのコーチング・マネージメントについて、今後の競技力普及の観点からみても、学術的なソースとして共有されるべきであろう。それらを示す取り組みとして、中・長期計画を第Ⅰ期：2011年-2014年、第Ⅱ期：2015年-2018年、第Ⅲ期：2019年-2022年に分けて策定した。大学ラグビーの、特に人数不足によりチームがリセットとなった復興期のクラブの場合、トレーニングや戦術面の成長とともに、クラブの文化作りも必要となる。特にラグビーについては、その競技的特性から「コアバリュー [12]」¹⁾と位置付けられる競技の根底を支える文化があり、それらを浸透させるためには3期、すなわち各学年、4年が入れ替わる3期が必要であると想定し、中・長期計画を設定した。

それゆえに、本実践研究においては、所属人数が十分ではない、大学ラグビーにおけるチームの発足のような状態から、一定の競技力を得た中堅チームへ成長し、所属する地域での上位を伺うチームへと進む取り組みを「トレーニングピリオダイゼーションモデル」「チームマネージメント」「TI」「TD」の4つの様相に分類すると共に、第Ⅰ期：2011年-2014年、第Ⅱ期：2015年-2018年、第Ⅲ期：2019年-2022年での競技力向上における詳細を実践研究として明らかにすることを目的とした。

2. 競技に適した能力の発掘 (Talent Identification; TI)

高体連の報告によると、ラグビーの加盟登録状況は2003年の学校数1,252、人数（男子）30,419人から2023年の学校数862、人数（男子）17,034人と半数近くの減少となっている [6]。もちろん少子化の影響とも考えられるが、サッカーやハンドボールなどは増加傾向にあることから、ラグビーの競技普及という観点からみると深刻な状況である。

一方で大学ラグビーに目を転じると、競技人口は高校と比較して学校数で23.3%、人数で33.8%となっており [8]、関東、関西の有名チーム以外は選手獲得に苦しんでいるチームが多いことが推察される。さらに東海地区の大学においては2022年度、22チーム（Aリーグ8チーム、Bリーグ8チーム、Cリーグ6チーム）がリーグ戦に参加した [8]。その中でもAリーグは全て私立の大学チームであり、授業料免除、入学金免状等の特待制度や留学生プレーヤーの入学などの条件が整った、いわゆる強化クラブに指定されて活動しているチームが多く占める。加えて、ラグビーは他の競技以上にポジションの多様性が求められる。例えばスクラムを組むフロントローであるプロップ、フッカーは専門職とされ、大学レベルになると競技力向上とともに、安全面の観点からも他のポジションの代用は困難である。また、高校時まで他のポジションを担っていたプレーヤーがフロントローとしてプレーするとしても、ある一定の訓練が必要とされる。さらに戦術面からも、高校まではスクラムの競技規則が制限されており [12]、ゲームに大きな影響を及ぼす。当然のことながら各大学はフロントローの獲得をTIの重点プレーヤーとして目指している。

このような状況下の中でのNGURFCのTIに関する取り組みを2点に分けて論じる。

2.1. リクルートターゲット

第Ⅰ期から第Ⅲ期の活動の中で、プレーヤー及び学生スタッフ129名が在籍してきた。それぞれプレーヤーは大学側がリクルート活動を行い、入学するリクルート群（Recruiting Group; RG）と高校の指導者の推薦や本人の希望で入学する非リクルート群（Non Recruiting Group; NRG）に分類される（個人情報の扱いによりデータは公表しない）。NRGに関しては進学先としての決定要件も大きく影響している。大学の知名度や学部の専門性、クラブの競技レベルなどさまざまである。必然的に、プレーヤーの競技への取り組みに関しては未知数な部分が多々感じられる。

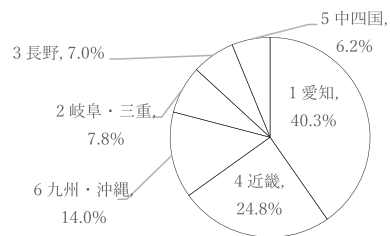
一方で、RGは必然的に所属するチームに対して情報収集しターゲットングを行い勧誘する。ターゲットのプレーヤーの獲得が叶わずとも、同等のプレーヤーを推薦されることもある。そこで第Ⅰ期では、リクルートターゲットを、これまでに在籍してきたプレーヤーが所属してきた強豪校に絞った。もちろん全国の強豪大学や東海地区の大学と競合することが多い。非レギュラークラスの選手が所属することでも、基礎的な技能、戦術の理解が伴っており、その強みを活用してチームの基礎作りを行うことができる。また前述のように、フロントローの獲得はチーム力向上への即効性を持っていることから、特にRGに対してリクルートを進め、チームのパフォーマンスに大きく貢献する選手が所属し貢献した。

2.2. リクルート構成

第Ⅰ期より第Ⅲ期までリクルートを行い、

129名の選手が所属した。図1に選手の出身高校の構成を示した。愛知県内の選手が40.3%を占めた。愛知県の高校ラグビーの競技人口は比較的減少のスピードも比較的緩やかで、選手数も一定数で競技レベルの観点からも適正な割合といえる。また地元ということもあり、入試広報の観点からも、力を入れて勧誘活動を行ってきた。

しかし競技力向上に関してみると、他府県からのリクルートも必要となる。当然ながら愛知県外の大学も全国の大学との競合になる。関東には大学対抗戦とリーグ戦の2グループが上位から下位までのリーグ、同様に九州、関西及び全ての地域にチームが存在する。加えて大学の知名度などがリクルートに影響し、プレーヤーの獲得は困難となる。そのような状況で、後述する活動方針（チーム育成における目的）や高校指導者との人間関係を構築し、信頼を得る努力を行ってきた。図1に第Ⅰ期—第Ⅲ期の選手構成を示した。前述の通り、愛知県内の選手での強化は難しく、RGの選手の獲得を目指し他府県にもリクルート活動を行なった。その結果、特に近畿(24.8%),九州・沖縄(14.0%)のプレーヤーの所属が12年での競技力向上に大きく影響を及ぼしたと推察される。



□1 愛知 □4 近畿 □6 九州・沖縄 □2 岐阜・三重 □3 長野 □5 中四国

図1. 第Ⅰ期—第Ⅲ期の選手構成

3. トレーニングピリオダイゼーションモデル

3.1. ピリオダイゼーション（長期目標）

NGURFUは強化クラブに指定され、強化クラブ指定され運営されている。その規程は、

- (1) 活動成績の向上による本学知名度の社会への浸透
- (2) 活動成績の向上による本学学生の愛好心の醸成
- (3) 全各号による本学志願者の増加への寄与とされている。その上で特待生や業務委託できる外部指導者、強化クラブとしての経済的な援助を受けており、その責任は大きく担っている。また表1に示した通り、2012年からはNGU Athletics憲章 [9] が制定され、宣誓式が行われている。それらの教育的方針と本学の建学の精神、大学（学部）のポリシーを鑑み、筆者のコーチングポリシーを加えて、以下の活動方針（チーム育成における目的）を設定した。

-社会に出てから通用する、企業が求める人材の育成

表1. NGU Athletics憲章

<ol style="list-style-type: none"> 一 強化クラブは、名古屋学院大学を代表するスポーツクラブとして、建学の精神「敬神愛人」およびスポーツマンシップを尊び、学内外において常に模範となる生活態度、部活動を心がけ、勉学、競技において、本学の誇りとなるよう精進に努める。 二 強化クラブに所属する部員は常に高いモチベーションを維持し、責任ある行動をとることにより競技力のみならず人間性を高め、のぞましい人格を形成することで、名古屋学院大学生として模範となるよう努める。 三 強化クラブは大学名を付けて対外試合を行うことから、すべての部員は大学を代表する選手であることを自覚し、品位ある行動と競技力を高めることに努める。

-チーム力向上

-東海地区の競技力向上及び普及支援

-10年後、20年後にラグビー文化を伝えられる選手またはコーチの醸成

-大学及びスポーツ健康学部の戦略的活性化

これらの活動方針はチーム力向上の上での指針であるのはもちろんであるが、プレーヤー及び学生スタッフの人生、大学や所属する地区、そしてラグビーそのものの発展に寄与することも目的としている。また、この12年間を3ピリオド（4年間×3）に分類して中長期計画を立てた。

第Ⅰ期：2011年-2014年：復興期

第Ⅱ期：2015年-2018年：進行情

第Ⅲ期：2019年-2022年：達成期

第Ⅰ期～第Ⅲ期の達成目標：全国地区対抗大学ラグビーフットボール大会²⁾（以下、地区対抗と表記する）優勝

3.2. トレーニングピリオダイゼーション（年間計画）

表2に1年間のトレーニングピリオダイゼーションモデルを示した。大学ラグビーは1シーズン制、秋シーズンのみのリーグ編成で行われる。春季にセブンス（7人制）で行われ、優勝チームは関西学生セブンスフェスティバル（12チーム）に出場の参加権利を得るが開催名、競技特性からみても学生レベルにおいては重きをおかれていないのが現状である。

一方で公式戦のリーグは9月の上旬より開始される。つまり、シーズン終了の11月まで遡ると約10ヶ月のトレーニング期を準備できる。しかしながら、強豪校ほどのモチベーションやレディネスが十分ではないプレーヤーが多いのが実情である。それゆえに競技力向上を図る上で、TDについて十分な準備をしなければなら

表2. NGURFC ピリオダイゼーションモデル

月	1月				2月				3月				4月				5月				6月				7月				8月				9月				10月				11月				12月				1月			
週	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
予定	ストレッチ・面談				試験期間				長期オフ				基礎スキル・体カトレーニング				セブンス大会				練習試合				試験期間				オフ				強化練習・学校/管平合宿				リーグ戦・全国大会出場決定トーナメント				チーム力強化				全国大会							
期分け	移行期								第1準備期				第1試合期/第2準備期								第3準備期				第2試合期				維持期-第3試合期																							

ない。それは必ずしも最新のスポーツ科学に則った手法を取る必要はないと判断した。これから競技力が向上する対象に適した手法、後述する目標や成果が明かなTDを準備することによってチーム力の向上を図った。

また、コミュニケーションの伸長も並行して行わなければならない。15名とスポーツ競技の中でも多い人数を必要とする競技なので必然的に密なコミュニケーションを構築することも必要であり、チーム力の向上を図るチームビルドも必要に応じて取り入れた。

4. チームマネジメント（組織運営）

学生スポーツの課外活動の位置付けであるが、強化クラブに指定されていることから通常のクラブ以上に適切な運営がなされなければならない。学生主体の運営に委ねることが教育上も必須ではあるが、現状としては選手以外の学生スタッフと学内外のスタッフのサポートを受けないと、円滑かつ適切なチーム運営はままならない。表3にサポートスタッフの例を示した。表3からみてとれるのは、絶対数である。他大学とは異なり、環境的に単学部での活動を余儀なくされるNGURFCでは、プレーヤーはもちろんのこと活動に参加するマネージャーやトレーナー、アナリストといった学生の活動が制限されてしまう。

表3. スタッフの例(2023東海学生ラグビーリーグプログラムより抜粋)

	NGURFC	C大学	N大学
部長	1	1	1
監督	1	1	1
HC	1	1	1
コーチ	2	3	2
TL		1	
学生TL		6	
管理栄養士	1		
MG	1	3	14
アナリスト		2	
HC：ヘッドコーチ TL：トレーナー MG：マネージャー			

一方で、他大学は学部・学科の特性を活かしたトレーナーの養成やマネージャーが多く在籍し、チームの運営を支える。NGURFCでは12年間で平均4名の学生スタッフが活動を行ってきた。当然、チームを運営していくには十分な人数ではなく、プレーヤーが兼務する主務やスタッフ側が関わらざるを得ない現状があった。それらのデメリットを解消するためNGURFCでは委員会制度を実施している。表4に委員会制度の一覧を示した。

活動に関して必要とされる委員会を設立し、適切な人数を配置し、学年ごとに振り分け、上級生を中心とした各リーダーの統率の元、担当

表4. 委員会制度一覧

委員会名	人数	仕事内容	4年	3年	2年	1年	担当スタッフ
主務	2	対外マネジメント（レフリー依頼・試合調整・主務会等）、活動日誌					
副務	3	部内・学内マネジメント（試合時運営、学内自治会対応等）					
発注・会計	3	ジャージ等採寸、メーカー対応、会計					
ジャージ	4	公式戦ジャージ・ピブス管理					
メディカル	4	テーピング・消耗品購入・試合時ベンチ運営					
S&C	2	ストレングス管理（記録入力等）、ウォームアップ・クールダウン主導					
栄養	3	プロテイン管理、栄養関係買い物、体組成入力					
イベント・広報	4	イベント立案、SNS管理（ツイッター、インスタ、HP）					
美化	3	グラウンドの美化担当（ゴミ袋、忘れ物）、大掃除の仕切り					
テクニカル	2	映像機材管理・準備					
用具	4	練習用具準備・片付け・管理、試合時荷物準備					

リーダー陣	キャプテン・
	バイスカプテン・
	BKリーダー・ FWリーダー・

スタッフと連携し適切な運営を行っていく。各年度の反省や特性を踏まえ、次年度には柔軟に委員会を発展解消していくことにより、合理的な運営につなげるのである。加えて全プレイヤーが所属することにより、グラウンドでのプレー以外でもチームへの責任感と帰属意識を涵養することも目的とする。結果として前述の活動方針（チーム育成における目的）である「社会に出てから通用する、企業が求める人材の育成」の習得の場としての期待も求めることができる。

5. 適切に計画されたプログラムによる能力の育成 (Talent Development; TD)

TIで述べたプレイヤーの入部の動機はさまざまである。大学から新たにプレーを希望するスポーツトランスファー[2]のプレイヤーから、全国大会の決勝を経験して、より高いレベルの社会人チームでのプレーをも視野に入れるプレイヤーなど幅が広い。そこでのハイパフォー

マンズレベルのトレーニング計画や実行は、競技力途上の大学グレードに対し、必ずしも有効に作用する可能性が高くないことをこれまでのコーチング経験から痛感した。そこで第I期後半から取り組んだTDを3点示す。

5.1. アテスト（選手間相互評価）

「アテスト」とはゴルフの用語であり、ストロークプレーでラウンドが終わった後、メーカーがスコアに誤りがないかを確認してサインをすることである。直訳すると、「証明する」という意味になり、サインそのものまたは確認の一連作業を指す。第I期の前半、すなわち2011年、2012年のシーズンを終え、チームはA2リーグ残留からBリーグに降格と最も厳しい時期であった。そこから2012年、2013年とリクルートしたプレイヤーが入部しチームの活動意欲が高まった。その際、チーム再興期であるがゆえ、トレーニング、セッションにおいても規律や規範といったものが維持できなかった。そこでコーチと検討し、プレイヤー相互が

各プレーヤーを他者評価して高め合うというシステムを「アテスト」として考案した。

日々のトレーニング・セッション等を2月程度ごとのアテストを行った。カテゴリーとしてアタックポリシー (A TT policy), ディフェンスポリシー (DEF policy), チームポリシー (TEAM policy), オフザグラウンド (OFF the ground), 本質・覚悟の5カテゴリーに分類した。このカテゴリーは一貫して変更はなく、ラグビーの本質であるといえよう。10点採点に関しては各プレーヤーの認識の相違を解消するために、一定の採点例を紹介し基準を構築した。また、ユニット (FW/BK), ポジションごとのグループの結果も公開した (別表1)。さらに各カテゴリーに詳細項目を設定し、各プレーヤーに10ポイント満点で各プレーヤーを評価し公開、フィードバックした (別表2)。この結果、各プレーヤーはトレーニング、グラウンドセッションの際に、他のプレーヤーに見られている緊張感が生起してそれらの質の向上につながった。さらにユニット間及びポジションごとにアウトプットすることによりユニット同士、ポジションごとの帰属意識や対抗心を持たせることも感じ取ることができた。また詳細項目、例えばATT policyで「パスやエンドパス」、DEF policyの「リロードアクション1, 2, 3DEF」、TEAM policyの「戦略の理解 (MID + 20M system)」といった現時点でチームがフォーカスを当てている具体的な技能・戦術内容の深まりがチーム力の向上にもつながったといえる。さらにOFF the groundや覚悟・本質ではラグビーに取り組むことにも目が向けられており、ラグビーのコアバリューや私生活の管理にも影響し、結果として活動方針 (チーム育成における目的) に向けたチームの活動にも高まった。

一方、これらの取り組みはコーチング側にも有用に作用する。各カテゴリーの詳細項目の達成具合を確認し、グラウンドセッションの修正やフィードバックの根拠となり得ると共に、各プレーヤーの評価値を確認することによりプレーヤーの選手選考 (セクションポリシー) の根拠となり得る。

しかしながら、アテストに関しては競技力途上の大学グレードに対して有用であり、さらなる上のパフォーマンスレベルでは必要性を感じ得ない。なぜなら一定のフォーモンスレベルであれば、そもそもアテストを行う必要のないレディネスを兼ね備え持っており、プレーヤーの人数も増加することが予期され、その煩雑さを考慮すると、NGURFCでは第I期後半から第II期前半で終了した。

5.2. ウェイト総排気量

ラグビーにおけるウェイトトレーニング (ストレングストレーニング) は、競技特性を考慮すると安全面の配慮からも、非常に重要なトレーニングといえる [11]。本来、通常のトレーニングと共に重視しなければならないウェイトトレーニングではあるが、競技力途上の大学グレードでの取り組みとして効果的な実施が困難であることが想定された。単純な反復的な動作の繰り返しで、重量が上げると身体的に大きな負荷がかかる。さらに数値的な数値が向上することは確認できても、実際のパフォーマンスや傷害防止のリスク回避の根拠と明確には示すことはできないのが実情である。

そのような状況で効率良くかつ効果的なウェイトトレーニング指標として「ウェイト総排気量」をチームで考案した。通常、ウェイトトレーニングの最大筋力の測定は1RM法などで行われるが、第I期では最大筋力と共にトレ

ニング量そのものの数値化を試みた。ラグビーにおいてもベンチプレス、スクワット、デッドリフト、いわゆるピック3を行うのは効果的であるし常識的であるが、第Ⅰ期では動作の習得に時間を要するデッドリフトに変えて、パワークリーンを対象にした。数値の算出は目標までの期間内に、それぞれに示された前述の3つメニューをどれくらい、どこまで行ったかを算出した。公開する際にはアテスト同様、個人、ユニット、ポジションごとにリリースした。さらに3つの数値を合算し総排気量として個人の結果をリリースした（別表3）。この結果、個々人の数値が明確となり競争心を植え付けるとともにウェイトトレーニングに対するモチベーションとして各プレイヤーの意識の向上に有用な作用を及ぼしたといえる。

一方で、無理なメニューの遂行や、適切な動作の維持や怪我したプレイヤーへの対処など課題は残る試みとなった。

5.3. タックルスタッツ

ラグビーの場合、双方のチーム力が拮抗していれば競った試合が展開されるが、チーム力の均衡が崩れると容易に大差の結果を伴ってしまう。代表的な技能はスクラムであるが、それ以上に防御の技能が影響する。特にタックルについては、さまざまな先行研究が報告されており[1][3]、第Ⅱ期の結果も成功率とダブルタックルの生起数が示されている[7]。第Ⅲ期においても継続して行われており、プレイヤーの特に非レギュラー群には一定のモチベーションの向上につながっている。別表4に2022年シーズントレーニングマッチのタックルスタッツの一例を示した。第Ⅱ期から分析項目を変更した。NGURFCの弱みとして、繰り返し防御を行う

る。その現象を解消する、すなわち繰り返し防御を行う機会を得ることを生起させることを狙いとする分析項目として「saving」を設定した。定義としては「完全にゲインした相手にリアード入り、フェイズとして生起している。」、言い換えると「相手プレイヤーの大幅な前進を後方より阻止し、再度防御に機会を生起させる」ことである。「saving」はポジションにより生起数の増減があり、各プレイヤーへの評価という観点からではなく、チーム全体の評価として行っている。結果として、別表4では「saving」の生起数が20回と示されたように、今後も防御の評価の指数として、タックルスタッツの分析は競技力向上の一助になり得ることを伺わせた。

6. 結果

以上に述べた第Ⅰ期：2011年-2014年、第Ⅱ期：2015年-2018年、第Ⅲ期：2019年-2022年に対する中・長期計画について、達成された東海学生ラグビーリーグの順位を図2に示した。平均すると第Ⅰ期は11.3位、第Ⅱ期は6.3位、第Ⅲ期は6.0位と一定の成果、すなわち競技力向上である中・長期計画の実現を果たしたといえよう。

第Ⅰ期では復興期と位置付け、特にDIに重

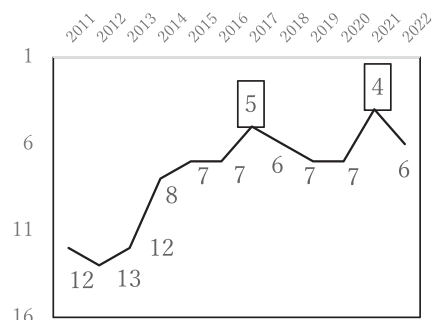


図2. 第Ⅰ期～第Ⅲ期の順位

きをおき、適格なプレーヤー獲得のためのリクルート活動を行った。結果としてはBリーグ降格という経験をしたものの、その状況から立ち直り、最終的に8位の成績を収め、上位リーグへの昇格トーナメントに進むことができた。その際、TDとしての競技力途上の大学グレードへのアプローチとして「アテスト」「ウェイト総排気量」等を取り入れ、効果的なコーチングアプローチへの知見を得ることができた。

第Ⅱ期においてはそれらを継続しつつ、TDの効果が現れたプレーヤーの増加から2017年度、到達目標である地区対抗の出場を果たし、優勝を勝ち取ることができた。これは目標としては第Ⅲ期までの実現を想定していたが、第Ⅱ期において達成したのはプレーヤーの努力である。その際、TDの数量的な根拠を示すことはできないものの、競技結果に付随する成果と考えることができる。その後、東海学生リーグでの地区対抗出場決定チームが1位繰り上がったことから、チーム育成における目的である、「東海地区の競技力向上及び普及支援」に貢献したといえよう。翌年2018年度も出場を果たし、準優勝に留まったものの、その後東海地区から優勝校が輩出できていない結果を鑑みても、一定の成果である。

第Ⅲ期ではAリーグに定着を果たしつつも上位に目標を定め、2021年シーズンには4位の成績を収め、創部からの最高位を得た。今後はさらなるTIとTDの試みが競技力向上の観点から求められる。しかしながら現在の学生スポーツをみると、大学が一定のスポーツ種目に特化して、いわば広告塔としての活動と混濁していることも散見される。多額な援助や施設の提供、留学生の招聘、特待生の獲得などがそれである。その歪みなのか、最近でもさまざまな不祥事が引き起こされている。それらの現状に

対し、NGURFCとしてはNGU Athletics憲章の堅持と活動方針であるチーム育成における目的を常に念頭においた教育活動が、今後の競技力向上の架け橋になると信じていきたい。

7. 結論

以上より、本実践研究ではNGURFCのコーチング及びマネージメントに関して第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期を通して競技力途上の大学グレードにおける結論は以下4点である。

- TIにおいては、競技人口の減少の中でポジション等の戦略的かつターゲットを絞った強豪校へのアクセスが効果的である。
- トレーニングピリオダイゼーションモデルについては大学やクラブの方針に従って中長期目標を設定し、適切なTDを策定していく必要がある。
- チームマネージメントはチームの実情に応じた運営を行うとともに、教育的な配慮を行うことによりグラウンド外でもチームへの責任感と帰属意識を涵養することも狙いとする。
- TDについては各期間に適切な手法、成果が俯瞰できる内容を準備することが、特に競技力途上の大学グレードに必要とされる。

名古屋学院大学論集

別表1. アテスト詳細

カテゴリー	詳細項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9
		選手 1	選手 2	選手 3	選手 4	選手 5	選手 6	選手 7	選手 8	選手 9
ATT policy	バス&エンドバス	1.6	3.4	2.6	4.6	1.2	2.8			4.4
	ベネトレート&ラインブレイク&アーリーコミット	2.6	4.8	3.8	5.2	4.2	3.2			5.6
	ブレイクダウン (BC + 3on the ball)	2.8	3.8	3.6	5.6	2.4	2.6			4.2
	レッグドライブ (ラック&モール成立後)	3.2	5.2	3.4	5.6	3.8	2.6			4
DEF policy	リロードアクション 1, 2, 3, DEF	2.6	3.4	3.4	4.8	2	2.6			4
	ラインオーガナイゼーション (グー・チョキ・パーコール)	2.8	3.2	2.6	4.2	2.8	3.8			4.6
	ラインコントロール, プッシュスピード	2.4	3.4	2.8	0.8	2.4	2.4			4.2
	ストップ&ゲートクローズ&ビハインドタックル	2	3.6	2.4	4.6	1.6	2.2			4.2
TEAM policy	戦略の理解 (MID + 20M system)	1.8	4.2	2.6	6.4	2	4			5.6
	ユニットトレーニング (戦術の理解と役割への取り組み)	4.2	4.6	4	5.6	2.2	4.6			4.6
	ポジショナルトレーニング	3.8	5.2	3.8	5.2	2.6	3.4			4.2
	ウエイトトレーニング&コンタクトトレーニング	4.8	6.6	4.2	6.4	3.8	5			4.8
OFF the ground	取り組みの姿勢と積極性	4	7	4	6.6	2.6	4.2			6
	誠実さとオールアウトの精神	3.8	6	3.6	6.6	2.4	3.8			4.6
	同調性や協力精神	4	5.2	3.2	6.8	2.2	3.2			5.2
	自己管理能力	2.6	5.2	3.6	7	1.2	4			5.8
覚悟・本質	勝利への執念と覚悟	5	6.8	4.2	8.2	3.4	5.2			5.8
	セルフコンディショニング	2.8	5.2	4	6.2	1.2	5.2			6

各カテゴリー平均	ATT policy	###	3.16	4.82	3.43	5.58	2.44	3.60	###	4.88
	DEF policy	###	2.45	3.40	2.80	3.60	2.20	2.75	###	4.25
	TEAM policy	###	3.65	5.15	3.65	5.90	2.65	4.25	###	4.80
	OFF the ground	###	3.60	5.85	3.60	6.75	2.10	3.80	###	5.40
	覚悟	###	3.90	6.00	4.10	7.20	2.30	5.20	###	5.90

合計平均	—	3.35	5.04	3.52	5.81	2.34	3.92	—	5.05
RANK	—	23	10	21	4	26	17	—	9

		PR	HO	LO	FL, 8	SH	SO	CTB	WTB	FB
ATT policy	バス&エンドバス	2.53	2.00	3.13	3.40	5.40	6.10	4.20	3.00	3.80
	ベネトレート&ラインブレイク&アーリーコミット	3.73	3.70	4.13	5.40	2.80	3.40	5.15	3.85	3.20
	ブレイクダウン (BC + 3on the ball)	3.40	2.50	4.13	5.25	2.90	3.80	4.40	3.65	3.50
	レッグドライブ (ラック&モール成立後)	3.93	3.20	4.20	4.40	2.30	3.80	4.50	3.95	3.40
DEF policy	リロードアクション 1, 2, 3, DEF	3.13	2.30	3.93	4.15	3.90	4.90	4.35	4.45	3.30
	ラインオーガナイゼーション (グー・チョキ・パーコール)	2.87	3.30	4.07	3.25	4.40	5.30	5.25	5.30	4.10
	ラインコントロール, プッシュスピード	2.87	2.40	3.53	4.45	3.80	5.60	5.05	4.40	3.90
	ストップ&ゲートクローズ&ビハインドタックル	2.67	1.90	3.87	4.45	3.90	5.00	4.75	3.65	2.70
TEAM policy	戦略の理解 (MID + 20M system)	2.87	3.00	4.80	4.85	4.80	6.60	4.65	4.20	4.60
	ユニットトレーニング (戦術の理解と役割への取り組み)	4.27	3.40	5.33	4.60	5.00	6.50	4.90	4.30	4.20
	ポジショナルトレーニング	4.27	3.00	4.27	4.85	5.30	6.70	5.45	3.75	3.60
	ウエイトトレーニング&コンタクトトレーニング	5.20	4.40	4.93	4.00	3.70	5.40	5.95	4.00	3.10
OFF the ground	取り組みの姿勢と積極性	5.00	3.40	5.60	5.30	4.60	6.10	6.10	4.65	4.80
	誠実さとオールアウトの精神	4.47	3.10	4.80	4.60	4.40	6.10	4.90	4.25	3.80
	同調性や協力精神	4.13	2.70	5.27	4.10	4.40	5.90	4.95	4.35	4.00
	自己管理能力	3.80	2.60	4.87	4.35	4.90	6.20	4.90	4.35	3.80
覚悟・本質	勝利への執念と覚悟	5.33	4.30	5.80	6.45	5.10	6.80	6.25	5.45	5.30
	セルフコンディショニング	4.00	3.20	5.13	6.30	4.40	6.80	5.90	4.70	4.30

各カテゴリー平均	On the ground	3.40	2.85	4.07	4.63	3.35	4.28	4.56	3.61	3.48
		2.88	2.48	3.85	4.08	4.00	5.20	4.85	4.45	3.50
	Offtheground	4.15	3.45	4.83	4.58	4.70	6.30	5.24	4.06	3.88
		4.35	2.95	5.13	4.59	4.58	6.08	5.21	4.40	4.10
	覚悟	4.67	3.75	5.47	6.38	4.75	6.80	6.08	5.08	4.80

合計平均	3.89	3.10	4.67	4.85	4.28	5.73	5.19	4.32	3.95
個人ランクの平均	15	22	12	12	15	8	11	14	17
ポジション間のランク	8	9	4	3	6	1	2	5	7

競技力途上の大学グレードにおけるコーチングに関する一考察

10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	30
選手	選手	選手	選手	選手	選手	選手	選手	選手	選手	選手	選手	選手	選手	選手	選手	選手	選手	選手	選手
10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
2.2	2.8	5.4	2.2	2.6		3.4	7.4	3.4	7	5.2	5.2	4.6	4.4	2.6	2.2	4.8	2.8	4.8	
3	3.8	6.8	4	4		6.8	3.6	2	4.2	2.6	8.6	5.2	4	2.8	3.8	4	4.6	3	3.4
3.4	4.8	7.4	4	3.4		6.2	4.2	1.6	4.6	3	7.8	4.8	2.6	2.4	3.2	3.6	4.2	3.6	3.4
4	4.6	7.4	2	2.6		5.6	3	1.6	5.2	2.4	8.2	4.8	2.4	2.6	3.2	4	4.8	3.8	3
3	4.8	4.4	3.6	3.4		5.2	4.4	3.4	5.8	4	6.2	5	3.6	2.6	6.2	3.6	4.4	3.6	3
3.2	4.4	4.2	2.4	2.6		3.8	5.6	3.2	6	4.6	8.4	4.4	5.4	2.8	7.4	4.2	5.4	4.2	4
3	3.4	6.2	3.2	4		4.4	5.4	2.2	7	4.2	8.6	4.6	4.6	2.4	5.2	4.2	4.2	4	3.8
2.8	4.6	5.8	3.4	4.4		4.2	5.6	2.2	5.6	4.4	8.6	4.4	3.6	2.4	4.6	3.6	3.8	2.6	2.8
3	5.8	9	3.4	3.4		3.6	7	2.6	8	5.2	8.4	3.2	4.2	2.8	5.8	3	3.6	4.4	4.8
3.6	7.8	7.2	3.2	3.8		4.2	7	3	8	5	8.4	4.8	4.2	2.2	5.6	3.4	3.6	4.6	3.8
3.4	5.2	6.2	4.4	4.6		4.2	6.6	4	8	5.4	8.8	5.2	5.2	2.6	4.6	3.4	3.6	3.4	3.8
4.4	5.6	5.2	2.4	4.2		4.2	3.4	4	5.8	5	9.8	8.4	3.6	2	4.8	4	4.2	3	3.2
4.6	6.2	8.2	3.8	4.6		4.6	5.6	3.6	7.4	4.8	9	7.6	6.2	1.6	5	3.4	4.6	5.6	4
4	5.8	6.6	4	3.6		4.2	5.4	3.4	7	5.2	6.2	6	5.8	1.6	5.2	3	4.6	4.2	3.4
4.6	6	5.2	3.6	3.6		4	5.6	3.2	6.6	5.2	6.6	5.6	5.6	2	6	3	4.2	4.2	3.8
2.8	6	5.6	4.6	2.4		4.8	6.2	3.6	7.2	5.2	8	3.8	5	2.8	5.4	3	4	5	2.6
5.4	6.2	9.4	5.8	4.6		6	6.8	3.4	8	5.6	9.4	5.8	6.8	3	6.4	3.4	5.8	6.2	4.4
3.8	5.6	9	6.2	4.2		5.8	4.8	4	8	5.6	8.8	5	6.6	3.2	6	3.4	3.8	5.6	3

3.13	4.20	6.43	3.68	3.67	###	4.73	5.42	3.02	5.68	3.30	8.06	4.77	3.35	2.47	4.72	3.69	4.53	4.10	3.61
3.00	4.30	5.15	3.15	3.60	###	4.40	5.25	2.75	6.10	4.30	7.95	4.60	4.30	2.55	5.85	3.90	4.45	3.60	3.40
3.60	6.10	6.90	3.35	4.00	###	4.05	6.00	3.40	7.45	5.15	8.85	5.40	4.30	2.40	5.20	3.45	3.75	3.85	3.90
4.00	6.00	6.40	4.00	3.55	###	4.40	5.70	3.45	7.05	5.10	7.45	5.75	5.65	2.00	5.40	3.10	4.35	4.75	3.45
4.60	5.90	9.20	6.00	4.40	###	5.90	5.80	3.70	8.00	5.60	9.10	5.40	6.70	3.10	6.20	3.40	4.80	5.90	3.70

3.67	5.30	6.82	4.04	3.84	—	4.70	5.63	3.26	6.86	4.69	8.28	5.18	4.86	2.50	5.47	3.51	4.38	4.44	3.61
19	7	3	16	18	—	12	5	24	2	13	1	8	11	25	6	22	15	14	20

全体	FW	BK	A
3.68	3.02	4.35	4.329
4.22	4.45	3.98	5
3.97	4.17	3.77	4.886
3.96	4.15	3.77	4.971
3.96	3.63	4.29	4.5
4.24	3.43	5.05	4.657
3.96	3.28	4.65	4.514
3.85	3.52	4.17	4.543
4.53	4.22	4.85	5.343
4.74	4.58	4.89	5.557
4.65	4.32	4.97	5.214
4.72	4.74	4.71	5.4
5.18	5.11	5.26	6.129
4.62	4.54	4.69	5.271
4.55	4.37	4.74	5.1
4.52	4.28	4.75	5.371
5.81	5.85	5.77	6.571
5.12	5.02	5.22	5.8

3.96	3.95	3.97	4.80
4.00	3.47	4.54	4.55
4.66	4.47	4.85	5.38
4.72	4.57	4.86	5.47
5.46	5.43	5.49	6.19

4.56	4.38	4.74	5.28
------	------	------	------

別表2. アテストランキング

順位	ポジション	名前	5月11日	7月14日	11月12日	5月11日	7月14日	11月12日
1	CTB/WTB	選手名	4.81	6.54	8.28	7	1	1
2	SO	選手名	6.26	6.26	6.86	2	2	2
3	FL	選手名	5.46	5.65	6.82	4	3	3
4	HO/PR	選手名	4.45	4.33	5.81	10	9	4
5	SH	選手名	4.75	4.74	5.63	8	6	5
6	LO	選手名	3.53	4.52	5.30	15	7	7
7	CTB	選手名	6.37		5.18	1	27	8
8	LO	選手名	4.46	4.10	5.05	9	11	9
9	PR	選手名	2.15	3.34	5.04	27	23	10
10	CTB	選手名	4.25	4.17	4.86	12	10	11
11	NO8	選手名	2.79	3.62	4.70	23	17	12
12	SO	選手名	2.13	3.50	4.69	28	21	13
13	WTB/FB	選手名	4.98	2.76	4.44	5	26	14
14	SH	選手名	3.12	4.10	4.38	18	12	15
15	FL/LO	選手名	3.04	3.60	4.04	19	18	16
16	HO/FL/NO8	選手名	3.20	3.27	3.92	17	24	17
17	FL	選手名	2.38	4.46	3.84	26	8	18
18	LO	選手名	3.80	3.84	3.67	14	15	19
19	FB/SO	選手名	3.00	3.66	3.61	20	16	20
20	PR/LO	選手名	4.42	3.90	3.52	11	14	21
21	WTB	選手名	4.01	3.93	3.51	13	13	22
22	PR	選手名	2.85	2.33	3.35	22	28	23
23	SH	選手名	2.74	2.51	3.26	24	27	24
24	CTB	選手名	2.61	3.20	2.50	25	25	25
25	HO	選手名	3.39	3.37	2.34	16	22	26
26	PR	選手名	5.51	5.07		3	4	27
27	LO	選手名	2.94	3.58		21	19	27
28	FL	選手名	1.67	3.53		29	20	27
x29	WTB/SH	選手名				—	—	27
			3.75	4.00	4.58			

別表3. ウェイト総排気量

(3/25 ~ 7/15 35days)

2014/8/13 release

ベンチ			パワークリーン			スクワット			total		
1	選手名	71530	1	選手名	47545	1	選手名	172970	1	選手名	245830
2	選手名	63975	2	選手名	44015	2	選手名	158955	2	選手名	148510
3	選手名	63950	3	選手名	42175	3	選手名	157855	3	選手名	1660555
4	選手名	63770	4	選手名	41910	4	選手名	147920	4	選手名	263800
5	選手名	63250	5	選手名	40895	5	選手名	132960	5	選手名	233900
6	選手名	61350	6	選手名	40240	6	選手名	127795	6	選手名	221360
7	選手名	61145	7	選手名	39590	7	選手名	104655	7	選手名	152210
8	選手名	58685	8	選手名	38620	8	選手名	101990	8	選手名	176820
9	選手名	58005	9	選手名	37840	9	選手名	96660	9	選手名	299845
10	選手名	56730	10	選手名	37265	10	選手名	96015	10	選手名	197505
11	選手名	55900	11	選手名	37250	11	選手名	93905	11	選手名	182630
12	選手名	54660	12	選手名	36830	12	選手名	92190	12	選手名	198775
13	選手名	54570	13	選手名	36705	13	選手名	89835	13	選手名	198610
14	選手名	52960	14	選手名	34325	14	選手名	86710	14	選手名	89300
15	選手名	51870	15	選手名	34210	15	選手名	86480	15	選手名	124665
16	選手名	47925	16	選手名	34010	16	選手名	85940	16	選手名	213625
17	選手名	46625	17	選手名	33495	17	選手名	82705	17	選手名	111975
18	選手名	45600	18	選手名	32190	18	選手名	82630	18	選手名	172195
19	選手名	45490	19	選手名	30955	19	選手名	82085	19	選手名	177140
20	選手名	42755	20	選手名	30370	20	選手名	80650	20	選手名	183615
21	選手名	42730	21	選手名	29980	21	選手名	80440	21	選手名	142740
22	選手名	42355	22	選手名	29930	22	選手名	77185	22	選手名	140060
23	選手名	41930	23	選手名	29240	23	選手名	71955	23	選手名	184575
24	選手名	38945	24	選手名	28990	24	選手名	70770	24	選手名	168455
25	選手名	37735	25	選手名	28475	25	選手名	60285	25	選手名	157850
26	選手名	37020	26	選手名	26760	26	選手名	44165	26	選手名	194085
27	選手名	32430	27	選手名	23770	27	選手名	39565	27	選手名	156620
28	選手名	29495	28	選手名	19175	28	選手名	38010	28	選手名	169085
29	選手名	26400	29	選手名	17305	29	選手名	36340	29	選手名	116660

別表4. タックルスタッツ例

〇月〇日 v〇〇大学

		Dominate	Even	saving	Passive	Miss	Total	ミス 含めた 総数	%_1	%_2
1	選手1	0	2	1	1	1	4	5	80%	60%
2	選手2	0	10	0	1	1	11	12	92%	83%
3	選手3	0	3	0	0	2	3	5	60%	60%
4	選手4	0	2	0	1	2	3	5	60%	40%
5	選手5	0	4	1	0	0	5	5	100%	100%
6	選手6	0	8	0	0	3	8	11	73%	73%
7	選手7	0	3	0	0	0	3	3	100%	100%
8	選手8	0	3	0	1	1	4	5	80%	60%
9	選手9	0	3	1	0	1	4	5	80%	80%
10	選手10	0	8	5	2	0	15	15	100%	87%
11	選手11	0	4	0	4	2	8	10	80%	40%
12	選手12	0	2	3	0	1	5	6	83%	83%
13	選手13	0	2	4	0	0	6	6	100%	100%
14	選手14	0	5	0	2	5	7	12	58%	42%
15	選手15	0	3	1	0	0	4	4	100%	100%
16	選手16	0	1	1	0	1	2	3	67%	67%
17	選手17	0	4	0	3	1	7	8	88%	50%
18	選手18	0	0	1	1	2	2	4	50%	25%
19	選手19	0	0	1	0	0	1	1	100%	100%
20	選手20	0	0	0	1	2	1	3	33%	0%
21	選手21	0	0	1	0	0	1	1	100%	100%
			67	20	17	25			80%	69%
						129				

定義		* %_1: Dominate + Even + saving + Passive/Miss
tackle	相手をバインドして倒せている。ダブルもカウント。	* %_2: Dominate + Even + saving/ Passive + Miss
Dominate	相手をコントロールし、押し返す。テンポを落としていいる。	
Even	概ね相手を倒してフェイズとして生起している。	
saving	完全にゲインした相手にリアーで入り、フェイズとして生起している。	
Passive	タックルシチュエーションになっているが大幅なゲインを許すか抜かれている (スピードは減退)	
Miss	完全に抜かれる、外されて相手のスピードを減退できない。チームのDFエラーは除く	

注

- 1) 競技規則のラグビー憲章に記されている内容であり、全てのレベルでプレーする人たちの基準を「品位」「情熱」「結束」「規律」「尊重」と示している。
- 2) 「大学選手権」の開始よりさらに14年前、1951年に始まり「大学選手権」に出場権を持たないチームにとってもう一つの大学ラグビー選手権として長らく行われてきた大会である。例年、瑞穂ラグビー場で開催されている。

参考文献

- [1] Carmen M. E. Colomer (2020) Performance Analysis in Rugby Union: a Critical Systematic Review, Sports Medicine-Open 6(1).
- [2] 海老原修 (1990) スポーツ・トランスファーとスポーツ・ドロップアウトのスポーツ経歴の比較-その2, 日本体育学会第41回大会.
- [3] 古川拓生 (2006) ラグビー競技におけるタックルプレーの様相について, 筑波大学体育科

学系紀要29: 71-75.

- [4] 古川拓生 (2022) 育成, フットボールの科学, Vol. 18, No1: 89-95.
- [5] 勝田隆, 大修館書店 (2014) 知的コーチングのすすめ.
- [6] 高体連加盟登録状況高体連, https://www.zen-koutairen.com/f_regist.html/. (参照日2023年12月12日).
- [7] 早坂一成 (2018) 競技力途上の大学グレードにおけるゲームパフォーマンス分析, ラグビー科学研究, 29-1: 9-11.
- [8] 名古屋学院大学スポーツ健康学部コロキウム資料 (参照日2023年4月12日).
- [9] NGU Athletics 憲章, <https://www.ngu.jp/campuslife/club/competitive-sportsclubs> (参照日2023年12月12日).
- [10] 日本コーチング学会 (2017) コーチング学への招待, 大修館書店.
- [11] 鈴木啓太 (2023) 傷害予防の側面からみたラグビー科学研究, ラグビージャーナル, 2: 10-13.
- [12] World Rugby(2023) Rugby Union, World Rugby.

[Research Notes]

A Study on Coaching in University-level Rugby: Developing Teams toward Greater Competitiveness

Kazunari Hayasaka

Abstract

In this practical research, we will examine aspects of improving the competitiveness of a university-grade rugby team that is still in the process of becoming competitive, by focusing on periodization, team management, talent identification (TI), and ability through appropriately planned programs. It was classified into TD (Talent Development). Actually, the 12 years of NGURFC under the supervision of the author are divided into Phase I: 2011–2014: Restoration period, Phase II: 2015–2018: Progression period, and Phase III: 2019–2022. Achievement period. It showed how coaching efforts helped achieve the ultimate goal of winning the national intercollegiate (Chikutaikou) rugby football tournament.

Keywords: University rugby, competitive ability improvement, sports coaching, sports management